

横浜ナザレン教会2019年降誕節第三主日礼拝説教
「神の家族とされる」ルカ福音書 8:19～21・申命記 29:28～30:14

【聖書箇所】ルカ 8:19～21

ルカ 8:19 さて、イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のために近づくことができなかった。20 そこでイエスに、「母上と御兄弟たちが、お会いしたいと外に立っておられます」との知らせがあった。21 するとイエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行ふ人たちのことである」とお答えになった。

申命記 29:28 隠されている事柄は、我らの神、主のもとにある。しかし、啓示されたことは、我々と我々の子孫のもとにとこしえに託されており、この律法の言葉をすべて行うことである。30:1 わたしがあなたの前に置いた祝福と呪い、これらのことがすべてあなたに臨み、あなたが、あなたの神、主によって追いやられたすべての国々で、それを思い起こし、2 あなたの神、主のもとに立ち帰り、わたしが今日命じるとおり、あなたの子らと共に、心を尽くし、魂を尽くして御声に聞き従うならば、3 あなたの神、主はあなたの運命を回復し、あなたを憐れみ、あなたの神、主が追い散らされたすべての民の中から再び集めてくださる。4 たとえ天の果てに追いやられたとしても、あなたの神、主はあなたを集め、そこから連れ戻される。5 あなたの神、主は、かつてあなたの先祖のものであった土地にあなたを導き入れ、これを得させ、幸いにし、あなたの数を先祖よりも増やされる。6 あなたの神、主はあなたとあなたの子孫の心に割礼を施し、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの神、主を愛して命を得ることができるようにしてくださる。7 あなたの敵とあなたを憎み迫害する者にはあなたの神、主はこれらの呪いの誓いをことごとく降りかからせられる。8 あなたは立ち帰って主の御声に聞き従い、わたしが今日命じる戒めをすべて行うようになる。9 あなたの神、主は、あなたの手の業すべてに豊かな恵みを与え、あなたの身から生まれる子、家畜の産むもの、土地の実りを増し加えてくださる。主はあなたの先祖たちの繁栄を喜びとされたように、再びあなたの繁栄を喜びとされる。10 あなたが、あなたの神、主の御声に従って、この律法の書に記されている戒めと掟を守り、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの神、主に立ち帰るからである。

11 わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。12 それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。13 海のかなたにあるものでもないから、「だれかが海のかなたに渡り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。14 御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。

1 家族という運命共同体

皆さんは年末年始をどのように過ごされたでしょうか。年末は、家族総出で大掃除や餅つきをして新年の準備をする、そしてお正月には、家族や親戚が集まってお祝いをする…数十年前の日本の家族の姿でした。ですが、もっと前、食べていだけで大変な時代は、年末年始だけでなく、一年中、家族全員総出で生きる為に働いていました。イエス様が地上で生きておられた時代はまさにそうです。ほんの一部の支配者層を除き、ほとんどの家族が、大人も子どもも家業や家事に携わり、生きるために家族総出で働いていたのです。夫婦や血縁のある者達が共に生きる運命共同体、それが家族でした。今日は「神の家族」について、聖書に聴いていきたいと思います。

2 マリア、主の弟たち

今日の聖書箇所には久しぶりに母マリアが登場します。「あなたは神の霊に包まれ、男の子を身ごもる」人間の救いの為にかげがえのない大切な独り子をお与えてくださる神の愛に圧倒され、み前に低くへりくだり、額づいて「お言葉どおりこの身になりますように」と額づいた乙女マリア、その人です。しかし、人間というのは複雑です。いろんな面がある。そして、時の流れと共に変わっていくものでもあります。現実の力は強い。自分の乳房をふくませ、夜泣きをあやし、おむつを替えた我が子。彼を神の独り子と見るよりも、自分のお腹を痛めたがえのない息子として、マリアが考え行動したとしても無理からぬことです。また、イエス様の後にマリアとヨセフの間に生まれた弟たちも同じだったでしょう。家族の一員として共に生活した、頼りがいのあるお兄ちゃん。喧嘩をしたこともあったかもしれない。息子であり兄でもあるイエス様が、突然家を出た。そして「神の国がやってきた」と告げ知らせ、町々、村々巡り歩き人々を癒しているという。「いったいどうなっているのだろうか」彼らはイエス様を心配し様子を見るために、ナザレ村からやってきたのではないのでしょうか。家族である息子の、兄の様子を知りたいというのは、当然の感情だと思います。

ですが、イエス様を自分の息子、自分の兄だと思っている限りには、神の言葉を聴くことはできません。それは私どもも同じであります。私どもも、また、人間中心の考え方を捨てない限り、神の言葉は耳に入って来ないのです。それは、折角、父なる神によって灯された命の光を器で覆い、寝台の下においてしまう、愚かなことであります。

3 弟子たち、女性達

さて、そのようにイエスの母、弟たちがやってきた時、多くの群衆がイエス様を、十重二十重に取り囲んでいました。母や弟たちはイエス様に近づけません。この時、主イエスの周りにいたのはどのような人々でしょうか。8章の冒頭には、主が神の国の福音を宣べ伝える為にガリラヤ地方の町々、村々を巡り歩いたとき、十二人の弟子達と女性達が一緒にいた…とあります。十二人の弟子達の4人は漁師であったことが知られていますし、徴税人出身のレビもいました。また、娼婦をしていたであろうと考えられているマグダラのマリアもいれば、高級官僚の妻、上流階級の出身のヨハナもいた…という具合に彼

ら・彼女らの出身は、バラバラです。彼らに共通するのは、イエス様の言葉と行いを通して、父なる神を知り、それまでの自分が変えられたこと、そしてイエス様を慕って、従ってきたことです。イエス様はそんな彼らを見渡しつつ、「**わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行かう人たちのことである**」と仰るのです。この言葉は、主イエスの周りにいた人々に、非常に強い印象を与えたでしょう。みな驚いた。その驚きは、主イエスの十字架と復活の後、ますます大きくなりました。

4 神の家族

なぜなら、主イエスは、十字架刑で殺された三日後に復活され、父なる神のみ元へと帰っていかれたからです。そして、それから五十日目、約束の聖霊が、イエス様に従っていた人々の上に降りました。聖霊とは、目には見えない形のイエス・キリスト、目には見えませんが確かに私どもに働かれる霊なる神です。この聖霊によって、人々は、主イエスが神の独り子、子なる神であることを知らされました。聖霊により隠されたものが公けになり、顕わになったのです。その神の御子が、「神の言葉に聞き従う人は私の母であり兄弟だー私の家族である」と仰った。神の御言葉に聞き従えば、神の血脈に連なる者とされ、神の子とされるというのです。なんという大胆な言葉でしょう。

5 御言葉に聞き従うことは簡単か？

しかし、イエス様は、そこで条件を出しておられます。「神の言葉を聞き行おう」という条件です。神の言葉…とは、聖書に記されている父なる神の戒め、主イエスの教えであります。この教えに耳を傾け、それを行う…それは、教えによっては、とてつもなく難しい事ではないでしょうか。例えば、イエス様の代表的な教えに「あなたの敵を愛しなさい」というものがあります。敵とは、自分の存在を脅かす者。そんな相手を大切に想い愛することなど、通常の人間にできる事ではありません。このような無理難題と思える課題をクリアできるほどに人格的に卓越した優秀な人々でなければ、神の家族にはなれない。そう主は仰っているのでしょうか、

6 申命記

さて、先ほど申命記30章をお読みしました。申命記とは、出エジプトの指導者であるモーセの遺言を集めた書物だと言われています。モーセは紀元前1300年前後の人じゃないかと推測されていますが、語り伝えられたモーセの遺言を編集し、申命記ができたのは、もっとずっと後で、紀元前6世紀以降。バビロン捕囚の頃だと考えられています。当時、バビロニアとの戦争に負けて苦しんだ人々は、国が滅びた絶望の中で祈り考え続けました。「何故、神の民である我々が戦争に負け、国が滅んでしまったのか」ーそして、自分たちが神の言葉に聞き従わず、自分たちの好きなように生きたからだ…と気づかされた。さらに、「自分たちを滅ぼすことは、決して神の御心ではない、自分たちをよりよく生かす為に神は国さえも滅ぼした」と確信し、神に立ち帰り、神の言葉に聞き従う命を生きよう！と信仰を新たにしました。人々が深い絶望の淵で見出した大きな神の憐れみでした。その神の憐れみに生きよ！という教えを、モーセの口に載せて人々への勸

告としたのが、申命記です。

11節からは、神の言葉、神の戒めは決して難しいものではない…ということが印象深く語られています。「御言葉は、あなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる」。ですが、この申命記の言葉は、「あなたの敵を愛しなさい」という主イエスの教えを私どもが到底行えない…という現実、真つ向対立しているように聞こえます。

7 私どもを血脈に連ならせる為に

いったい、神の言葉は行いやすいのか、それともとてつもなく難しいのか。両方とも正しいのではないかと思います。一点明らかなことは、私どもの力だけでは神の言葉を行う事はできないということです。ですが、私どもにはできなくとも、神の力をもってすれば可能なのです。その神が、私どものすぐ傍にいてくださる、私どもの心の中にいてくださる。だからこそ、自分の力では到底行う事などできない神の言葉を、神のお力を借りて行う事ができるようになるのであります。

私どもが、父なる神の言葉に聴き従えるようになる—その一点に、主イエスはご自身の全存在を懸けてくださいます。神の身分を後ろに投げ捨て、この世に降り、マリアの子として人となり、人々を教え導き、悪霊を追い出し病を癒し、死者を生き返らせ、人間を真に生かす神の義なる愛を大胆に新しく人々に宣べ伝えました。その果てに、十字架上の死でしか報いられなかったのです。十字架にその肉体を引き裂かれ血を流し、私どもの神への背きの罪を一身に背負い、贖ったのであります。私どもの心に口に、私どものすぐ傍らに霊なる神をもたらし、私どもが神の助けを借り、神の言葉を聞き行うことができるようにする為でありました。このイエスこそ、キリストであり、私ども被造物を清め、神の子とし、神の血脈につながる者、神の家族としてくださるお方です。キリスト・イエスを離れた神の家族は考えられません。

8 鶏鳴

ペトロの鶏鳴の出来事にその真理を見ることができます。これはペトロの物語であると同時に、また私どもの物語でもあります。十字架にかけられる日の前の晩、最後の晩餐のあと、主イエスは「あなた方は私につまづく」と弟子達の離反を予告されます。しかし、ペトロをはじめ弟子達は反発する。イエス様は、「鶏が二度なく前に、三度私を知らないという」とお答えになりますが、ペトロはなおも言い張ります。「たとえ一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは決してもうしません」と。そしてゲッセマネの祈りの直後、大祭司の部下たちに逮捕された主。後ろ手に縛られ大祭司の屋敷に犯罪人として連行されます。主に従っていた人々は逃げ去っていました。ですが、ペトロは、連行される主の後を密かに追い大祭司の屋敷に潜入します。しかし、ペトロの力もそれまで。屋敷の者に三度問い詰められたペトロは、三度とも「イエスなんて私は知らない。

私と彼はなんの関係もない」と大声で誓った。最後には呪いの言葉まで吐いた…と聖書は語っています。ペトロもまた裏切り、主はたったお一人になった、神の家族は消え去っ

た、その時。鶏が鳴きました。すると、主イエスは振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、主イエスの眼差しの中にいれられた瞬間、
我に返り、外に出て激しく泣いた…とルカ福音書は記します。ペトロは、自分に絶望し、粉々に打ち砕かれました。自分の力で主イエスのもとに留まろうと必死で大祭司の屋敷までついて来た、だけど自分の力では主イエスを裏切るしかできなかった。だが、そんな自分でさえも主イエスは赦してくださっている、愛してくださっている。この救い主イエス・キリストの赦しの眼差しの中で生きる時、私どもは神の家族とされるのではないのでしょうか。私ども一人一人を神の御言葉に生きる者する、私どもを神の家族とするのです。神の独り子、全宇宙の支配者であるキリストが、自分の命、存在さえ投げ出して、その一点に懸けてくださった、我々がそこに立ち続ける時、我々は神の子として清められ続けるのです。

9 神の言葉のもたらす自由

私どもは考えがちです。神の言葉を聞き従って生きるとは、非常に窮屈に思えます。自分の思うがままに生きる方が自由でいいのではないか？決してそうではないのです。神の言葉に聞き従う事は、私どもを自由にしてくれるのです。私ども人間は、自分の思いのままに生きたとしても、必ずしも幸福になれるとは言えません。私どもは、自分の想うままに生きているようで、実は自分の狭い価値観や自己中心的な考え、欲望に縛られて生きているのです。不自由な命です。一方、神の言葉に聞き従って生きる命には、キリストの信仰、希望、愛に生きる自由で溢れています。

信仰が与えられる前に縛られていた自己中心的な考えは、自分自身や周りの者達を傷つけ傷つけられてきたでしょう。しかし、神を信じ神の言葉に従って生きる時、我々はそのような自己中心的な不自由さから解放されるのです。

また、神の言葉に聞き従うことは、私どもを永遠の命へと導く…と聖書は語ります。肉体の死を超えた命に生きることができるということです。この地上の肉体の命だけとすれば、我々被造物はなんと虚しい存在でしょうか。あくせく働き、もがいて生きたとしても、行き着く先は棺桶なのです。ですが、神は、その御言葉をもって私どもを、死を超えて導いてくださっている。肉体が尽きて滅び去ったとしても、私どもは、父なる神のみ元で、キリスト・イエスと目と目を合わせて確かに見える時が来る。永遠を信じる希望が、私どもを、今だけに生きる偏狭な生き方から解放してくれます。

そして、神の言葉は、私どもをお互いに憎しみあう不自由さから、人に対する無関心の寒々しい生き方から解放してくださいます。人を憎むこと、無視すること、私どもはそうせざるを得ない悲しい存在である。しかし、そこには明日はない、救いはない。憎しみや無関心で心を満たしていれば、敵の命だけでなく、自分の命をも喜ぶことができなくなります。ですが、神の言葉を通じて神に深く愛されている事を知る時、私どももまた、人を愛することができます、神の言葉に聞き従う時、神の愛への自由へと解放されるのです。

自分を明け渡して神の言葉に生きることは決して楽ではありません。困難も多いことでしょう。この世は神の言葉とは無関係に人間の言葉に生きているのですから。けれど

も、神の言葉に生かされる自由 一神の家族として生きる自由こそ、人間として生きるもっとも幸せな生き方だと私は確信しています。キリスト・イエスの深く大きく静かで聖い眼差しの中には、命の光で、命の力で満ち溢れているからです。そこでこそ、まことに自分と他の人々の命を心の底から喜ぶ喜びがあり、父なる神への感謝があり、賛美があります。もっとも幸せな命、美しい命があります。

10 神の御業に参与する

しかし、神の御心は、今、ここに集められた私どもだけがこの幸福に生きることではないでしょう。私どもは、神の家族とされることで、神の国のご支配がこの地上に現れるという神の一大事業のお手伝いをするのです。最初に、「昔の家族は、生きるために一致して働いた。子供も手伝った。」と申しました家族のあり方です。もちろん、神の国をこの地上にもたらすのは私ども人間のなせる業ではありません。父なる神のみ業であります。しかし、私どもはその神のみ業に参与し、その為に働くことができるのです。言い換えれば、私どもは、父なる神の、そして、キリスト・イエスのパートナーとされるのであります。神はお一人でこの事業をなすことをよしとせず、儂い時を生きる私ども被造物を、ご自身のパートナーとしてくださったのです。それが、キリストによって神の家族の一員とされるということの、もう一つの面でもあります。

11 その後のマリア、弟たち

さて、今日の箇所だけ読めば、主イエスはマリアや弟たちを切り捨てたように見えるかもしれませんが、その実、主は招いておられるのです。しかし、肉の家族とは難しいものです。案外に本当の姿が見えにくい。実際、母マリアやイエス様の弟たちが、イエス様を救い主と受け入れ、弟子達の集まりに加わったのは、主の十字架と復活、昇天の後でありました。ルカ福音書の続編である使徒言行録 1:14 にはこうあります。「使徒たちは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた」。隠されていた神の啓示が、イエス様の十字架と復活で明らかになった時、母マリアも弟達も祈る群れへと加えられました。神の家族とされる時は、人間が決めることができません。神の時です。何事にも時があるのです。

私どもも、自分の肉的な家族がキリスト・イエスと出会い、信仰が与えられて幸せになって欲しいと願っています。ですが、現実はなかなか思うようになりません。肉親であるからこそ伝えにくいことがあります。しかし、だからこそ、私どもは、神の時が肉の家族にも訪れることを一所懸命、祈り続けていくのです。時には非常に長い間待つこともあるでしょう。諦めずに忍耐して祈り続ける時、必ず神は省みてくださいます。その為には、私ども一人一人が、神の言葉に聞き従いつつ、神の家族として歩んでいく事で、肉の家族に父なる神とイエス・キリストを伝えていく事が大切なのです。忍耐して待つ時間が、私どもを美しいよい土地へと変えていくのであります。

12 家族となり続ける

さて、肉の家族も、ある時点を境に突然、出来上がるわけではありません。毎日の生

活を共にし、お互いに一緒に生きることで家族になっていく…そういう面があります。神の家族もそうです。「わたしの母、わたしの兄弟達とは、神の言葉を聞いて行う人である」

との主イエスの御言葉のうち、「神の言葉を聞く」「行う」という動詞は、継続を表すものです。厳密に訳せば、「神の言葉を聞き続け、行い続ける」となるのです。結果が現れないからといって諦めず、忍耐強く神の言葉を聞き続け行い続けている時、私どもは神の家族という、美しい土地へと変えられていくのです。イエス・キリストの十字架のもとに集められた私ども、横浜ナザレン教会という神の家族もそうであります。全く異なる背景を生きてきたわたくし共は、ここで、キリストの言葉に従う交わりを目指し、共に祈り、共に礼拝を捧げ、伝道活動を行います。そうしてキリストの命を与えられた者としてお互いを知り、神の家族とされていくのです。一人が泣けばみなで泣き、一人が喜べばみなで喜ぶ、そのようなキリストにある交わりを続け、様々な問題を神と共に、兄弟姉妹と共に乗り越え、神の家族とされていきたい、そして、神の言葉に生きる喜びを、まだキリストを知らない人々に宣べ伝えていきたいと願います。